

随筆

ニュージーランド・ホリデー(その1)

竹原 宏

私達3人(県畜産課の岩井技師、北部酪農協の渡辺部長と私)は、蒜山地区に輸入されましたジャージー牛(98頭)を海上輸送するために、昨年の8月21日神戸より英国船「アマリック号」に便乗、9月2日ニュージーランドのオークランドに上陸、約1ヵ月間ニュージーランドの各地を巡り酪農事情を視察、10月2日再びオークランドより牛を積込み、10月16日神戸に帰りました。

本稿は私達3人の彌爾喜多道中見聞録です。

1、アマリック号の生活

「グッドモーニング」の声に目を覚ますと、白髪の巨漢がモーニングティー(コーヒーとクラッカー)を捧げて船室に入って来る。この巨漢の名をアエ・ムイといって、年は58才、私達のボーイを務めてくれる上海生れの中国人である。モーニングティーは朝6時になると必ず運ばれてくる。

彼の声で今日もアマリック号上の生活が始まるのである。

この船は、英国の船で、1万トンの新造大型貨物船である。時速20ノットの快速で、船内の設備はよく、船室は冷房がよく効いて、室内の床、廊下には絨毯が敷いてあり、バス、トイレもついており、高級ホテルに泊っているようで、全く豪華な船である。この船に乗っているのは、英国人士官20名余りと中国人水夫40名程と我々日本人3名である。

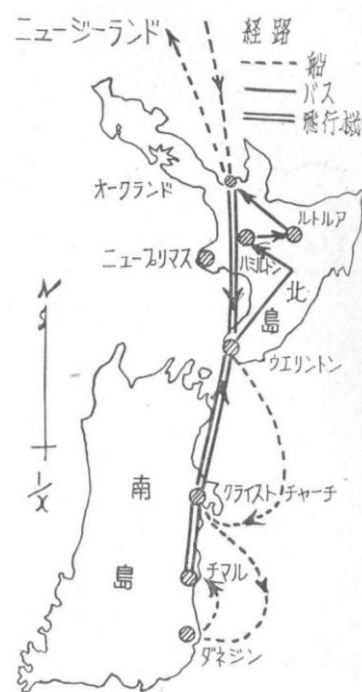
私達は、往路は何の用事もないので、毎日、朝から晩まで碁をうっていた。この船で苦労の種は食事であった。食事になるとボーイが琴を叩いて廻ってくるので、ネクタイをつけ正装して3階のサロンに集まる。このサロンは高級船員の食堂で、キャプテンを中央にして会食するように席が設けられている。英国の食事マナーは誠に厳重で食卓について雑談する人は1人もなく、テーブルの上にはホーク、ナイフ、スプーンの類が沢山並べてあり、ボーイも数人

でサービスするといった豪華さである。着席するとボーイがメニューを持って注文をとりに来る。

朝からフルコースの御馳走である。オレンジジュースに始まり、ライスバルブド、ウインナーソーセージ、焼卵、ローストコンビーフ、コーヒーに終る。昼はスープに始まりブロイラー、野菜サラダ、アンズ。夜はビーフのテキといった具合に大変な御馳走である。しかし、毎日出される料理は誠に大味で、塩と胡椒の味だけである。後でニュージーランドのホテルでとった食事も大体似たようなもので皆、味は単調であった。漬物に味の素をふりかけて喰っている日本人の舌に比べると、彼等の味覚が鈍いのかも知れぬ。

毎日、肉ばかり喰べさせられ、その上運動不足になってくると肉食に我慢ができなくなってきた。衆議一決、ボーイを買収してお茶漬けを喰うことにした。幸いにも中国人は飯を喰っておるので、ボーイにサロンを欠席するから飯と生野菜をどっさり船室に持ってくるよう命じた。寝台の上でインスタントではあったが、味噌汁、味付けノリ、タクアンの純日本のお茶漬け料理を喰べた。その味は、今でも忘れられない程おいしいものであった。後日、ニュージーランドのホテルの夕食時に東京の商社の人に、この位の夕食を東京で食べると幾ら位になるでしょうねと伺ったら、1人前3,000円はとられますよとの御返事であったが、この料理以上にお美味しかったお茶漬けは千金の価値があると思った。

神戸よりオークランドまでの航程は4,700マイル



岡山畜産便り 1965.01

である。時速 20 ノットで走ると 12 日でオークランドに着く。この間、ウラカス島附近で 1 回島影がみえただけである。紺碧の海原より外何も見えない日が何日も続く。1 週間程で赤道に達する。この頃から全く無風状態になり、船のゆれも感じない位平穏な航海となる。真赤な大きな太陽が西の水平線に沈むと満天の星座がその輝きを競い始め、涼風がデッキに寄ってくる。

この頃から毎夜映画が上映された。後甲板のマストにワイドスクリーンを掲げ、デッキから映写するのである。我々の観覧席は最前列のキャプテンの席の横に設けられ、後列に英国士官が並んでいる。下の甲板席が中国人のセーラー達の席である。最初の夜は西部劇であったためセリフは解らなくてもストーリーが解ったので、上映時間 2 時間も余り苦にならなかったが、次の日からホームドラマや喜劇が上映されたので全く退屈してしまった。西洋では映画会は 1 つの社交場であり、士官達は皆正装している。面白くないからといって途中で退場するのも失礼かと思い、牛アクビを噛み殺して頑張った。煙草ばかり吸っていたら翌晩にはスモーカー（灰皿）が私の席の前に設けられていた。

(筆者は岡山県立酪農大学校教授)